高山市を訪れる欧米人客　「旅行の個人化」進む

岐阜県の観光都市・高山市。インバウンド（訪日外国人客）が好調な同市で「旅行の個人化」が進む。ゲストハウスなど市内の簡易宿所は最近3年で急増した。とりわけ個人旅行を好む傾向がある欧米人客の比率が高いことも背景にありそうだ。

県北部飛騨地方にある高山市は「高山祭」や「古い町並み」で有名。外国人宿泊客数はほぼ右肩上がりで推移し、2017年は約51万3千人。これは同市の人口約9万人の5倍以上。簡易宿所の数は14年度までの3年がほぼ横ばいの約70施設だが、15年度以降の3年は急激に増えて17年度は113施設となった。

高山市の17年の外国人宿泊客の内訳はアジアが約6割、欧米豪が約3割。日本全体ではアジア約8割、欧米豪が約1割なので、高山市の欧米客比率の高さが分かる。

欧米客が多い要因は、官民の誘客PR効果と、「サムライルート」の定着にある。このルートは、名古屋市や長野県松本市から、高山市と合掌造り集落で有名な大野郡白川村を経由して、北陸へ抜けるもの。元々は欧州の旅行会社が考案したプランだといい、リピーターや「本物志向」の欧米人にうけた。

きめ細かい行政対応も個人客を後押しする。高山市では「無料公衆無線LAN（WiFi）＝ワイファイ」を14年から市内中心部で提供。17年のアクセスは約3万7千件に上る。外国人利用のトップ5は豪州、スペイン、米国、台湾、フランスの順で、やはり欧米が目立つ。単にインターネットにつなぐだけでなく、災害情報などをメールで送信するほか、ネットを通じてアンケートを行うことで、次の誘客活動につなげている。

飛騨・高山観光コンベンション協会の堀恭則会長は「国内旅行の頭打ちで、インバウンドが高山を支えている現実がある」とし「宿泊施設が増えることも大事だが、肝心なのは『おもてなしの心』で、地域を魅力的にすること」と話している。

岐阜新聞 ひだ高山総局編集部長 大成朋広

高山市上三之町の「古い町並み」を観光する外国人客